

あさくらそうてき

朝倉宗滴、

他に類をみない

養鷹法に成功する

戦 国大名にとって鷹狩は権力・経済力を象徴する嗜みであり、鷹の収集は戦国武将に共通する関心事でした。このため、鷹の交易や、優れた鷹を贈ったり鷹狩の獲物を献上する贈答儀礼は大名間で多く



鷲鷹図屏風 (左隻 / 円立寺蔵)

戦国武将の間で「鷹」は贈答品としても大変好まれました。宗滴は鷹に関する調教、飼育技術を研究し、当時で唯一、鷹の人工飼育に成功した人物ともいわれています。



オオタカ

(画像提供: 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館)

みられました。

朝倉氏の場合には、家中で鷹狩の知識・技術が普及しており、特に、朝倉宗滴は、庭で飼育する鷹に卵を産ませ孵化させるといって他に類をみない養鷹法に成功しています。通常、鷹は巣から雛を取って育てるか、若い鷹を捕えて飼育調教しますが、つがいを繁殖させて卵から育てる方法は大変珍しかったといえます。

また、宗滴が育てた鷹は百発百中で獲物を仕留めると評判で、都でも話題になったほどでした。

宗滴の鷹の飼育を記した『養鷹記』によれば、朝倉家には代々『唐流鷹秘訣条々』という鷹の飼育・訓練マニュアルが伝わっていたとされます。また、越前西谷の武士、外山余次郎に相伝された『鷹書』や、一乗谷の含蔵寺に住んでいた斯波氏子息の含蔵寺殿が求めた『鷹百首註』など、養鷹・鷹狩に関する知識を伝える様々な鷹書が伝授されており、越前で養鷹術が広く普及していたことがうかがえます。

では、なぜ一乗谷ではこれほどまでに養鷹が普及していたのでしょうか。実は、日本に初めて鷹狩の技術が伝わった場所が敦賀といわれることが関係しています。『養鷹記』にもこの伝説が記されており、敦賀郡司を務めていた朝倉宗滴が、その歴史的背景を踏まえて記したと考えられています。また、朝倉家中で鷹狩を学ぶ武士たちは、敦賀に來航して鷹狩を伝えた百濟人「米光」の肖像画を持っていたといえます。鷹狩を学ぶ武士たちが歴史と伝統を繰り返し意識し、鷹書に書き写したことが養鷹術普及の背景にあったのかもしれない。

ません。

鷹書の一つに、宗滴秘伝の『斎藤朝倉両家鷹書』が伝わっています。朝倉一族で最も鷹を愛し研究していたのは宗滴といえるでしょう。

関連史料・ゆかりの地

朝倉宗滴邸のあった「金吾谷」



近年、安波賀での発掘調査により出土した石敷遺構
(画像提供: 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館)



漆椀と下駄
(画像提供: 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館)

安波賀には「金吾谷」という地名が残っています。金吾とは、朝倉宗滴の官途名を唐風に呼びならわしたもので、安波賀に宗滴の屋敷があったといえます。安波賀は、下城戸を出てすぐ外の地区で、三国湊へつながる足羽川、北庄と美濃を結ぶ美濃街道が通り、都市一乗谷と外界の結節点でした。

【住所】福井市安波賀町 (JR 福井駅から浄教寺行き京福バス「安波賀」下車3分)

参考資料等

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編『第20回企画展 戦国のまなびや 朝倉文化 文武を極める』
宮永一美「越前朝倉氏の文化」福井県郷土誌懇談会編『越前・若狭の戦国』岩田書院

執筆・協力

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 学芸員 石川 美咲